

シンポジウム趣旨文：哲学教育とマスメディアの役割

企画・司会：河野 哲也（立教大学）

この10年間で、子どもの哲学が日本で急速に広まったのは、マスコミによる貢献が大きい。本シンポジウムでは、これらのマスメディアでのP4Cの導入にかかってこられた方々に登壇していただき、なぜ哲学や道徳の教育が、いまこれほど、マスメディアでとりあげられるのか、子どもの哲学や議論教育におけるマスメディアの役割について自由にご議論いただきます。

まず、NHK Eテレで素晴らしい番組『Q～子どものための哲学』を作っていたいただいた佐藤正和さんには、作成の経緯をお話しいたきながら、英語版をお見せいただきます。国立教育政策研究所で、「考え、議論する」道徳を推進されている西野真由美さんには、道徳科における考え、議論することの意義と教材としてのテレビや新聞についてお話しいたきます。そして毎日子ども新聞編集長でいらっしゃる木村葉子さんには、「哲学カフェ」のコーナーの意味や反響についてお話しいたきます。そして、総合討論として、教育におけるマスメディアの役割について、お三方でご議論していただき、今後の日本の教育の方向性とメディアのあり方など、ご自由にご発言いただきます。

提題者1：木村 葉子（毎日新聞社、学生新聞編集部長毎日小学生新聞編集長）

1936年に創刊した毎日小学生新聞（毎小）は、昨年85周年を迎えた。日刊の全国紙の小学生新聞としては最も歴史が長い。読者は小学生が中心だが、幼児から中高生もおり、保護者も一緒に読んでくれている。小学生新聞には中学受験を主眼に置いたものや、エンタメを充実させているものもある。毎小は創刊以来、社会と子どもたちの架け橋となり、社会に開かれた窓となることを目指している。

「てつがくカフェ」は2014年4月から、週1回の連載が続いている。「人はなぜ生きるのか」「ふつうとはなにか」「なぜ学校にいかなければならないのか」「夏休みの宿題はなぜあるのか」など、子どもたちの素朴なだけに答えづらい問いを、哲学者が紙面で真剣に語り合っている。

社会で起きているさまざまな事象は、一つの答えで解決できるものではない。しかし、デジタル社会を生きる子どもたちは、すぐに答えを求めがちだ。自ら問題を見だし、考え、自分なりの答えを持てる、真に生きる力を持った子どもが、「てつがくカフェ」を通じて育つことを願っている

提題者2：佐藤 正和（NHKプロデューサー）

2014年からNHKEテレで放送している子ども番組「Q～こどものための哲学」のプ

ロデューサーをしています。毎回、少年Qくんが日常の中のふとした疑問について、ぬいぐるみのチッチと一緒に対話しながら、自分なりの答えを見つけていく人形劇です。哲学監修には、本学会の大会運営委員長の立教大学の河野先生にご指導いただいております。先行きの不安な未来を生きていく子たちに、問いを見つける力、対話をしながら考えを深めていく術、そして、いろいろな意見や感じ方を許容する心を育みたいと思い作ってきました。全20話は、毎年繰り返し放送され、小学校の「道徳」の授業にも使っていただいています。今回は、その番組を少しご覧いただき、どのような試行錯誤をして、人形劇を作ったのか、その中で、どんな発見があり、どんな反響があったのかをお話できればと思います。このシンポジウムで、子どもたちの未来を照らしてくれる光を見いだせたらと期待しています。

提題者3：西野 真由美 (国立教育政策研究所)

2015年の学習指導要領一部改正により、小・中学校に「特別の教科 道徳」（道徳科）が設置された。その検討過程では、従来の道徳授業の問題点（心情理解に偏った形式的な指導、分かりきった「正解」を言わせる授業など）が指摘され、「考え、議論する」授業への質的転換が打ち出された。この改訂で強く意識されたのは、多様な価値観の存在を認識しつつ、他者と対話し協働しながらよりよい方向を目指す資質・能力の育成であった。では、道徳科の全面実施で質的転換は進んだのだろうか。新たに導入された検定教科書を見ると、問題解決的な学習を意識した教材開発が進むなど変化の兆しはあるものの、多面的・多角的に考えられる教材はなお少ない。教科書への依存度が高まり、多様な教材選択が難しくなったとの指摘もある。文部科学省が昨年度実施した調査では、過半数の学校が「議論して考えを深める」、「多面的・多角的に考える」ための指導を課題と捉えていた。子どもたちが共に考え議論する学びの実現には、もう一步踏み出す力が求められる。